



「あっ、見える見える！」

先に展望台に上がった女将が叫びます。

朝のうちは、くっきりと見えていた山並みが、昼になって、霞んできました。だから、見えるかどうか心配していたのです。

眺めると、眼の下の街並みの向こうに、大きな湖が広がっています。諏訪湖です。さらにその奥に、裾野を広げながらそびえている山が、ぼんやりと浮かんでいます。

そうです、富士山です。この山を見ると、何かホッとしますね。

左側には、青空を引っ掻くようなギザギザとした、八ヶ岳の峰々が連なっています。後ろを振り返ると、北アルプスの穂高連山が、薄く雪を抱いて輝いています。

眺めのいいところですね。

ここは長野県の真ん中あたり、標高千メートルを少し超えた、旧中山道の塩尻峠です。

私たちは、標高七百メートルぐらいの、塩尻宿から、ほぼ一直線の旧街道を歩いて上ってきました。

この坂が、長いこと、長いこと。急ではないけれど、ダラダラとした登りが続きます。地図を見たら「永井坂」となっていたから、昔の人も、やはりそう思ったのでしょう。

舗装もされていて、高速道路を跨いだり、国道をトンネルでくぐったりします。街道らしい雰囲気は失われていますが、所々に残る石碑などに、往時を偲ばせるものがあります。

「馬頭観音」や「牛馬守護神」などの碑は、牛や馬が大切な運搬手段だった時代の名残でしょう。途中には、武田信玄がこの地の豪族と戦ったときの、戦死者を弔った「首塚」などがあります。

こんもりとした土盛りは、一里塚の跡。傘を被った、微笑ましい親子地藏もありました。

このコロナ禍で、なかなか遠くへ行くこともできません。毎年行く山歩きも、山小屋が営業していません。

そこで人との出会いを避けて、街道歩きをしてみることにしたのです。物好きにも、。

昨年の秋は、中山道を塩尻から木曽福島まで。この冬は、長野市の自宅から上田までの旧北国街道を歩きました。そして、この秋に、塩尻から諏訪に抜ける計画を立てたのです。

地図を頼りに、昔の人のように、宿場から宿場へと、古い街道をたどってみようと思ったのです。

ところが、どこの街道も、すでに自動車のための道となっているのです。

時には、国道沿いを歩きます。ビュンビュンと通り抜ける車に注意しなければなりません。道を歩く人なんて、住宅街でも見かけませんでした。

何やら、時代に取り残されているような気分。

もっとも、私のそば打ちだって、便利な機械があるのに、いまだに手で、ぎゅうぎゅうと捏ねて

いるのですから、同じようなものです。

塩尻峠からは、急な下り坂です。諏訪湖が少しずつ近づいてきます。

手の入った古木のある民家の間を抜け、すこし大回りをして橋を渡り、古びた商店街のウィンドウの中で寝ている猫などを眺めて、目的地の下諏訪宿に到着です。ここは温泉が出るのですよ。



江戸時代の人は、1日に三十キロぐらいずつ歩いたと言いますが、私たちは、その半分と少しでクタクタです。

お世話になったのは、古い建物の続く一角にある、こじんまりとした宿。玄関部分は、大正時代に建てられたといいます。そのすり減った階段を登るにも、脚が、あっイタタ、。

さっそく湯に入って、手足を伸ばします。気持ちがいいですね。

今は舗装されているとはいえ、古くからの路の上を歩いてきた疲れが、掛け流しの湯に、溶けて流れていくようです。

そして、ぼんやりと、時代遅れもいいかなあ、と思ったりしました。